

岡崎市議会議長 様

支出番号

会派名

公明党

代表者名

畑尻 宣長

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政務活動報告書

令和 6年 1月 15日提出

活動年月日	令和 5年 10月 11日 (水) ~ 10月 13日 (金)	
氏名	畑尻宣長・野島さつき・土谷直樹	
用務先 及び 内 容	1	用務先 神奈川県 伊勢原市
	10月11日	内 容 宿坊体験型教育旅行について
	2	用務先 青森県 八戸市
	10月12日	内 容 第85回全国都市問題会議 1日目
	3	用務先 青森県 八戸市
	10月13日	内 容 第85回全国都市問題会議 2日目
	4	用務先
	月 日	内 容
備 考		

## 政務活動調査報告書

調査日	令和5年 10月11日(水)
視察場所	神奈川県 伊勢原市
調査項目	「宿坊体験型教育旅行」について
視察者名	畑尻宣長・野島さつき・土谷直樹
市の概要	面積：55.56 km <sup>2</sup> 人口：101,360人 人口密度：1,824人/km <sup>2</sup> 世帯：46,366世帯 経常収支比率：98.9% 実質公債費比率：7.9%

伊勢原市では、大山を巡る歴史的ストーリーが「日本遺産」に認定されたことを生かし、中高生を対象に教育旅行を誘致していることを知り、詳しく知りたいと思い視察してまいりました。

### <大山とは>

丹沢山地の東端に位置する標高1,252mの信仰の山。江戸時代には庶民の参詣である「大山詣り」が大流行し、大いに賑わいを見せた。地域や職によって、「講」を組み、集団で参拝する「大山詣り」は庶民による観光旅行や団体旅行の起りとも言われている。



### <先導師とは>

歴史と文化を伝える、阿夫利神社の神主、大山寺の住職、宿坊の主人

### <なぜ教育旅行なのか>

- 平成・令和の「大山詣り」の課題
  - ・交通網の向上により、宿泊需要が減少
  - ・伝統的な「講」の受入れが先細りし、「ただの旅館」としての宿泊客が増えた
  - ・団体旅行から個人旅行への転換とネット予約の普及
- 宿坊の特徴
  - 強み：古くから「講」を受け入れており、団体旅行の受入れに強い

弱点：個人旅行も受け入れられるが、1グループしか受け入れられない宿坊も多い  
 (十分な個室の準備が少ない)

- 教育旅行のメリット
  - ・複数の宿坊を活用して、「団体旅行」の受入れが可能
  - ・学校を疑似的な「講」として、先導師としての活動の継続
  - ・学生の将来的なリピーターに期待できる

<体験メニュー>

- ◆ 大山詣り体験
 

先導師の案内で宿坊から大山阿夫利神社下社まで登る体験

歴史を楽しみながら、自然豊かな大山の登山を楽しむ

宿坊への宿泊と合わせた基本の体験
- ◆ 浄書体験
 

大山に伝わる祓詞を書き写すことにより心身ともに清浄する神事
- ◆ とうふ作り体験
 

大山では江戸時代から豆腐が親しまれ、人々の旅の疲れを癒してきた

自分で作り、夕食でいただく体験
- ◆ 大山能教室・大山落語鑑賞



## 4 宿坊体験型教育旅行

### (3) 体験メニュー

宿坊での宿泊体験を中心とした、日本遺産「大山詣り」の体験を通じて、大山ならではの魅力を感じて貰うとともに、将来にわたるリピーター確保を目指す。

～主な体験プログラム～

<small>宿坊体験</small>	<small>大山詣り体験</small>	<small>歴史文化学習</small>
		
<small>豆腐料理</small>	<small>とうふ作り体験</small>	<small>大山能教室</small>
		

<実績>

- H30～R5
  - 受入学校数：16校
  - 受入人数：約2,300人
- 地元への経済効果：約600万円
- 先導師会旅館組合との連携の強まり

<今後の課題>

- ◇ 先導師の高齢化による宿坊の減少⇒産学連携やガイドの活用等の検討
- ◇ 滞在時間を増やすための体験ツアーの拡充
- ◇ ターゲット地域（東北、東海）での知名度の向上

### <所 感>・・・畑尻宣長

伊勢原市で行われている「宿坊体験型教育旅行について」視察して参りました。観光資源として神社仏閣があり、日向薬師春季例大祭や伊勢原観光道灌まつりなどがあります。その中で「大山詣り」という平成28年に日本遺産に認定された歴史遺産があります。この大山詣りは日本遺産の認定を受けることで、地域資源としての活路を見出したように感じました。「大山詣り」は、歴史的ストーリーを持っており、それをいかに活かすのかが重要であったと思います。しかし、近年の状況は芳しくなかったようです。もともとは、町内会単位で大山講を組織し、富士へ行くには7日かかるところ、大山は3、4日でお参りし、余った時間を江の島や金沢八景を経由して観光も出来るとあって、人気を博していたようであります。それが、交通網の発達により宿泊需要が減少し、「講」の受入れより、ただの旅館としての宿泊客となり、さらには、団体旅行から個人旅行へと変わっていったことにより宿坊の本来の役割が果たせなくなってきていたようであります。

そこで考え出されたのが、宿坊体験型教育旅行であります。江戸時代から続く大山詣りの体験を通し、歴史を学び、大山の自然を感じてもらおうというものです。

体験としては、大山詣り体験、浄書体験、大山とうふ作り体験、大山能教室・大山落語鑑賞が出来ます。これは、宿坊での宿泊体験を中心とした日本遺産「大山詣り」の体験を通じて、魅力を感じてもらい、将来のリピーター確保を目指していました。

この取り組みは、この場所でなくてはならない、唯一無二であり、体験が出来るという点で魅力を感じました。さらに教育という観点から歴史を感じる事が出来るということも特徴であります。平成30年から受入れが始まり、国内の学校だけでなく、海外からの受入れも行っており、日本の文化を伝える事が出来るものだと思います。また、周辺への経済効果もあり、ジビエフェアを開催するなど、広がりも見せ始めています。

このような取り組みは、本市に照らし合わせてみると、多くの神社仏閣があり、歴史があり、観光としてめぐるポテンシャルは高いと感じています。宿坊体験型教育旅行というのは、そのままあてはまりませんが、岡崎市の歴史を学ぶ、日本史を学ぶ上で見て回る価値のある場所は多く存在しております。支える檀家さんたちの理解も無ければ進まない話ではありますが、周辺の経済効果も期待できるような仕組みが組めたらと考えます。利用する方々にとっては、歴史と文化に触れる、学ぶことが出来、受け入れる側は、檀家さんとは違うリピーターの獲得、周辺地域の経済効果にも寄与するという、三方良しの事業となるようさらに現場に合った取り組みとなるよう考えていきたいと思っております。

### <所 感>・・・野島さつき。

伊勢原市のシンボルである大山は、古代から信仰の対象となり、「大山詣り」として、江戸の人口が100万人の時代に、年間20万人もの参拝者が訪れていたそうです。箱根から先への旅が難しかった江戸庶民にとって大山は近くて出かけやすい信仰の場であったことから大流行となり、浮世絵や歌舞伎、落語の題材にもなったほどの賑わいだったとのこと。

大山への参拝者をサポートしてきた先導師が代々営んでいるのが宿坊で、参道沿いに現在でも 30 以上残っています。

伊勢原市では、平成 28 年度に認定された日本遺産「江戸庶民の信仰と行楽～巨大な木太刀を担いで『大山詣り』～」を生かし、大山詣りのメインストーリーである宿坊と大山阿夫利神社の参拝を体験プログラムとして、平成 29 年に、中高生を対象に「宿坊型体験教育旅行」の制度設計を行い、平成 30 年から本格的な営業を始めました。プログラムの中には、宿坊の主人である先導師との交流をはじめ、浄書体験、とうふ作り体験、能体験及び落語体験といった日本の伝統に触れることのできるプログラムが用意されています。コロナの影響で中止になったこともありましたが、本年度までに 16 校、約 2,300 人が体験され、地元への経済効果も約 600 万円に上ったそうです。課題としては、先導師の高齢化による宿坊の減少や、高齢で登山ができなくなることによりガイドが不足すること、一泊体験し、明朝には他市へ移動することが多いため、市内での滞在時間を増やすための体験ツアーの拡充が挙げられています。東海大学観光学部の学生との連携プログラムを造成中とのことで、新たな視点での大山らしさを模索中だそうです。

「大山詣り」という地域に根付いている資源をうまく活用し、中高生をターゲットに教育旅行を誘致することで、市内の宿泊を促すとともに、若年層のリピーターの獲得を目的にされています。岡崎市においても、徳川家康公生誕の地という他に真似できない唯一の地域遺産があります。家康公ゆかりの寺社仏閣も多く存在しています。信仰と観光をうまく連携し、アフター大河に活用できないか、ドラマ館のガイドを生かせないか、伝統工芸とタイアップして何かできないか、中山間地域も含め宿泊に結び付くような体験ツアーの造成を提案できるよう、今後も勉強してまいります。

#### <所 感>・・・土谷直樹

伊勢原市の宿坊体験型教育旅行を視察し、その教育的かつ文化的な価値に深い印象を受けました。この事業は、生徒たちに伝統文化や自然環境を身近に感じさせる重要な役割を果たしています。大山の霊峰を舞台に、江戸時代から続く「大山詣り」の文化を現代の若者に伝えることは、単なる観光を超えた教育の場となっています。

特に印象的だったのは、宿坊での浄書体験や豆腐作りなど、手を動かし、五感で学ぶプログラムの豊富さです。これらの活動は、生徒たちに文化の奥深さを実感させるとともに、自らの手で何かを生み出す喜びを教えています。また、自然の中での活動は、生徒たちに環境への意識を高めさせ、自然との共生の大切さを学ばせています。

宿坊体験型教育旅行は、地域経済にも貢献しています。後継者不足により減少傾向にある宿坊の活用は、地域の伝統を守りながら、新たな観光客を呼び込む絶好の機会です。これにより、地域の人々に新たな活力を与え、地域の活性化にも繋がると考えられます。

しかしながら、宿坊の数の減少や修学旅行の誘致に伴う課題も見受けられます。これらの課題を解決し、より多くの生徒にこの貴重な体験を提供するためには、さらなる PR 活動やインフラの整備が必要です。

伊勢原市の宿坊体験型教育旅行は、文化と自然の調和が生み出す学びの場として、大きな可能性を秘めています。本市においても、このような教育的な観光事業を取り入れ、地域の文化や自然を生かした独自のプログラムを検討する価値があると感じました。

以 上

## 政務活動調査報告書

視察日	令和5年10月12日(木)～13日(金)
視察内容	八戸市：第85回全国都市問題会議
視察者名	畑尻宣長 野島さつき 土谷直樹
市の概要	面積：305.56 km <sup>2</sup> 人口：221,712人 人口密度：731.20人/km <sup>2</sup> 世帯数：110,242世帯 経常収支比率：89.7% 公債費比率：13.2%

### 第85回全国都市問題会議

#### <基調講演>

アートの役割って何だろう？

東京藝術大学長/アーティスト 日比野克彦

#### <主報告>

八戸市の文化・スポーツによるまちづくり

青森県八戸市長 熊谷雄一



#### <一般報告>

まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる

文化事業ディレクター/演出家 吉川由美

標高差1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出

長野県東御市長 花岡利夫

まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用

株式会社鹿島アントラーズFC取締役副社長 鈴木秀樹

#### <パネルディスカッション>

##### 【テーマ】

文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展

【コーディネーター】

東京大学大学院人文社会系研究科教授

小林 真理

【パネリスト】

合同会社 imajimu 代表取締役

今川和佳子

拓殖大学商学部教授

松橋 崇史

静岡県沼津市長

頼重 秀一

京都府綾部市長

山崎 善也

<所 感>・・・畑尻宣長

東京藝術大学長でアーティストの日比野克彦さんより基調講演をお聞きしました。「アートの役割って何だろう？」という問いかけから、ひとつは、アートとは「生きる力」と捉えて説明されました。その事例として、八戸市の美術館には、ジャイアントルームが備えられていることを捉え、ここはコミュニケーションが取れる、多様性である、持続可能性のある地域の拠点であるということでした。美術館が拠点となりコミュニケーションが生まれるという発想です。私としては美術館の在り方の発想の転換でした。また、SDGs が遅れていることも認識されたうえで、他大学との連携も模索しながら進められています。アートの役割について文化的な側面だけでなく、生きていく上での力であったり、多様性のある社会を築く基盤であったりと課題解決に大きく作用することを認識させて頂きました。

八戸市熊谷雄一市長から、文化・スポーツによるまちづくりと題し主報告を頂きました。以前、八戸ポータルミュージアム「はっち」に視察させて頂き、その数年後に、八戸まちなか広場マチニワを視察させて頂いた経緯があり、市長の公約によるところが大きくかかわってきていますが、まちづくりが目に見えて変わり、成果を出していると実感しました。様々ななかで、公営のブックセンター「本のまち八戸」が開館していたことには驚きました。「本を『読む人』を増やす、本を『書く人』を増やす、本で『まち』を盛り上げる」を基本方針として専門人材を確保しながら取り組まれています。もちろん地元の本屋さんとも競合しない形で進められており、活字離れを食い止め、作家さんたちを盛り上げていく、素晴らしい施策を展開されていました。

文化事業ディレクター、演出家の吉川由美さんより一般報告です。八戸ポータルミュージアムはっちが中心街再生の起爆剤となるよう 2011 年 2 月に開館させました。2010 年から 10 年間、はっちの文化芸術事業ディレクターとして、アートプロジェクトをディレクションされたのが、吉川さんです。立ち上げから、10 年間、携わってこられました。私が 1 度目に訪れたのは、出来て 1 年後くらいでした。それから、数年後、中のレイアウトや、お店が変わっていましたが、訪れる人が多いことは、変わりなく、さらに増えているようでありました。「アートの力で中心市街地を再生していこう」という明確なビジョンから、3 点の柱を打ち立てます。1, 中心市街地を関心空間にする。2, フラットなコミュニケーションの場を創る。3, 地域資源の価値をみんなで見出す。でありました。これを実行すべく、開館後も様々なイベントなどを行い進めてきました。本市に足りないと感じるのは、こういった一貫性のも

とでの施策、事業の推進ではないかと感じました。

長野県東御市花崗利夫市長より「標高差 1,500m の地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」と題し話をお聞きしました。人口約 3 万人で土地は、中央に千曲川が東西に流れ、その右岸から浅間山系にかけて標高差 1,500m に及ぶ南面傾斜の扇状地が広がり、左岸には標高 600～850m の 2 つの大地と変化に富んだ地形が広がっています。こういった地域固有の価値を創出したのが、水泳の高地トレーニング施設の設置でありました。スポーツ施設の建設・運営はすべて公費という考えでなく、ステークホルダーと相互に協力しあうという意識改革をし、建設・運営に至るまで応分の負担を求めるといった新しいスタイルで地域づくりを進めています。海外に行かないと出来なかった高地トレーニングが国内で出来たことによって、金メダルに繋がったという言葉も頂いたようです。欠点と思われることを個性としてとらえて活かしていく、その手法は考えていかなければいけない課題だと認識しました。

パネルディスカッションでは、東京大学大学院人文社会系研究科小林真理教授から、一巡した文化芸術を活用したまちづくりとして、自治体の文化行政を発展させるためには、縦割り組織に、文化で横ぐしをさしていくということが必要であると言われました。例としては、まちづくりのコアとしての文化・文化施設としていくことだということです。

静岡県沼津市頼重秀一市長からは、スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出として、フェンシングが盛んであったり、サイクリストから評価が高くサイクリストフレンドリーエリア沼津として、オリンピック・パラリンピック大会の自転車競技会場となるなど環境が整えられています。また、アニメでは「ラブライブ！サンシャイン！！」で作品の公開と共に聖地巡礼がはじまり、受け入れる市民とも交流が生まれるなど、まちづくりに欠くことが出来ない重要なコンテンツになっています。ここまでの取組として、アニメスタッフへのフィルムコミッションの一環として声優らの現地取材の同行案内や地元自治会への説明などをして支援してきた経緯があります。

様々な自治体の取組をお聞きし、本市に合った施策として、取り入れていくべき事柄も多く見受けられました。一般質問や委員会などで提案していきたいと考えています。

### <所 感>・・・野島さつき

「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」のテーマのもと、基調講演、主報告、一般報告、パネルディスカッションが行われました。

東京藝術大学長の日比野克彦氏の基調講演は、「アートの役割」について各地の美術館の取組も紹介しながら、「アートは生きる力」と言われていました。中でも、リバプール国立美術館の認知症患者を対象にした「ハウス・オブ・メモリーズ」の取組は、病院と美術館のコラボで、「思い出を語る」という文化的処方により、1 人の患者にかかる医療費が減少したとのことです。心に作用する「アート」の力を感じました。

八戸市長熊谷雄一氏の主報告は、八戸市で行われている「文化のまちづくりプラン」や「スポーツ推進計画」の取組を紹介しながら、拠点があること、専門人材がいること、居場所と出番を作ること、互いの顔や活動が見える空間づくりにより、コミュニティ感覚を醸成し、

交流が生まれる。多くの価値が集積してこそ、歩きたくなるといった、好循環なまちづくりが進んでいる現状を話されました。

一般報告では、祭りなどまちのソフトパワーと地域社会の分母を担う人づくりの重要性や、地域の欠点を認めたくえで転換思考をもって地域資源に繋げることの大切さ、地域の貴重な資源であるプロスポーツクラブの有効活用などを通し、社会課題を解決し、まちづくりの推進に繋げた成功例を伺いました。

2日目のパネルディスカッションでは、それぞれ地域資源を活かした取組を通し、他の分野からも学ぶこと、数字では説明できないプロセスを楽しむこと、関わっていない方への理解を進めることなど多様な人々を巻き込みながら、文化芸術・スポーツの取組を加速させ、まちが活気と魅力にあふれ、市民が誇りと愛着を持ち続けられるまちづくりをめざしていきたいとの結びでした。

岡崎市においても、祭りや山車の文化、サッカーや野球などの社会人スポーツ団体や全国大会常連の高校など、資源は数多くあります。それをどのようにまちの魅力と発展につなげていけるのか、今後も議論を深めていきたいと思えます。

#### <所感>・・・土谷直樹

第85回全国都市問題会議は基調講演、主報告、一般報告、パネルディスカッションが2日間に渡り行われました。

東京藝術大学長である日比野克彦氏の基調講演では、「アートの役割って何だろう？」と題して、アートが地域社会とどのように結びついているかが示されました。国内外の事例を通じて、アートが社会構築の基盤として持続可能な社会課題への解決策を提供し、人々の心を動かす力を持つことが強調されました。

青森県八戸市長の熊谷雄一氏による主報告は、八戸市の「はちのへ文化のまちづくりプラン」と「八戸市スポーツ推進計画」に焦点を当て、文化・スポーツを通じた都市開発の背景と取組について説明しました。特に、八戸ポータルミュージアムはっちの役割が、地域の文化・芸術・産業・観光・市民活動・子育て支援を統合する形で展開された点が注目されました。

一般報告では、吉川由美氏が「まちづくりの原動力としての文化政策」を発表し、八戸市の伝統行事や市民の参加を例に、地域に根差した文化活動の重要性を語りました。

また、長野県東御市長 花岡利夫氏による「標高差を活用したスポーツ・ツーリズムの創造」についての報告が行われました。標高差を生かした高地トレーニング施設の建設と運営に関する取組を紹介し、地域の特性を活かしたスポーツツーリズムの可能性を探求しました。この取組は、東京2020オリンピックで日本代表が達成した金メダル獲得に貢献したことも強調されました。

鹿島アントラーズFCの取締役副社長、鈴木秀樹氏が登壇しました。鈴木氏は、スポーツを地域社会の活性化に結びつける取り組みについて話しました。かつての農漁村だった鹿島アントラーズの本拠地が、工業地帯の開発を経て急速に発展した経緯や、新旧住民間の溝を

埋めるためのスポーツの役割が語られました。1993年のJリーグ発足に伴う、地元サッカーチームのプロ化やスタジアム建設に至る過程、自治体や民間企業との連携による地域振興の取組が詳述されました。また、鹿島アントラーズが関与する多様な事業展開、地域社会への貢献活動が強調され、プロスポーツクラブが地方自治体運営において重要な役割を果たすことが指摘されました。

最後に、パネルディスカッションでは「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」をテーマに、文化芸術とスポーツが地域発展にどのように貢献しているかが討論されました。地域の特性を活かしたまちづくりの重要性と、文化芸術およびスポーツがもたらす社会的・経済的価値についての洞察が共有されました。

この会議から学んだことは、地方自治体が文化芸術とスポーツを通じて、住民の心を動かし、地域の魅力を高めることができるという点です。文化活動やスポーツイベントが地域社会に与える影響は計り知れず、これらを活用することで、地域がより豊かで活気あるものになることが明らかになりました。本市においても、今回の先進的な取組を参考に、持続可能で魅力あるまちづくりを目指していきたいと思えます。

以 上